



ふれあい通信

山の辺の道を歩いて

会員・賛助会員の研修があり、この度六月二七日に奈良明日香と平城京を結ぶ道でもあった山の辺の道を有志二五人で歩きました。

まずは天理駅から長い商店街のアーケードを通って、石上神宮を目指します。天理教の教会本部の壮大な建造物に驚嘆し、坂を上ってやっと石上神宮へ到着。途中でリタイヤする前に集合写真をパチリ。

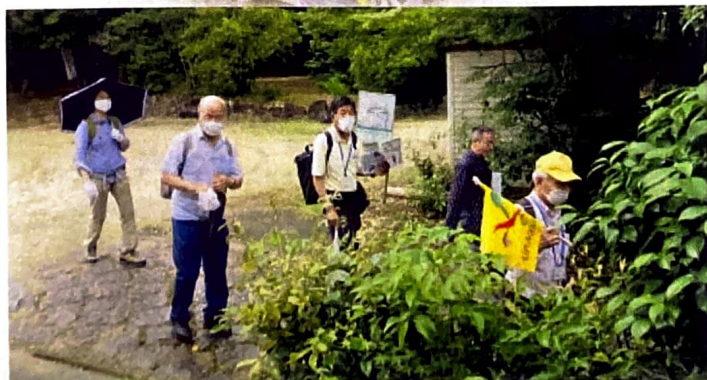
途中で小雨にも会いましたが、終始曇天で、大雨またはカンカン照りでもなく、この梅雨時期にしては好条件の気候の中、よく整備された遊歩道と、まるで畦道と見紛うような細道を、しかもアップダウンあり、石畳道ありで、姦しい乙女のお喋りも上り坂ではおとなしくなり「まだ続くの?」と哀願調になったりして、ガイドを担当していただいた今井、藤原両氏の解説でこんなに多くの社寺や古墳、万葉碑など多くの史跡がふんだんに散りばめられた小径であり、東海自然歩道とも重なることも再確認しました。

路傍には農家無人販売所が多くあり、新鮮野菜が百円均一で売られており、「美味しそう。安い。初物や。」と楽しい出来事もありました。私的な感動ですが、桧原神社の門前での小休止に疲れ火照った体に冷たいソフトクリームが今まで食べた中でも一番の美味しさでした。

大神神社では、茅の輪が設けられていまし

たが、三輪明神だけに茅の輪が三つもあるとは。そして、山の辺からは、耳成山と後方には畝傍山が望め、思い出深い研修でした。

京都史跡ガイド
ボランティア協会
会長 山田久男
編集 澤田 卓





赤色立体地図

チーム彩 高 貴美子

少し前になりますが、BSプレミアムの放送された「決戦、関ヶ原の巨大山城」を大変興味深く視聴しました。ご覧になられた方もたくさんおられると思います。

その幻の山城が発見されるきっかけになったのが「3D赤色立体地図」でした。航空機からレーザを照射、測量し尾根や谷などの凸凹な地形を可視化するという驚きの技術でした。その地図上に歴史学者でさえ知り得なかつた「玉城」（たまじょう）の存在が明らかになりました。

この城は元々南北朝時代にはすでにあつたと言われていますが殆ど文献にも登場することとはなく、ましてや関ヶ原との関係など疑われてこなかつたのです。

関ヶ原より西へ二キロ、標高三〇七mの山頂は明らかに不自然と思われる平坦で広大な大地が確認できました。番組では関ヶ原の戦いに備えて西軍が臨時に整備した城ではないかとの結論に至りました。

石田三成も笹尾山ではなく玉城で指揮を執り勝利を確信していたのかもしれない！ところが、新説として出てきた小早川秀秋の裏切りの痕跡が玉城にあると聞き耳を疑いました。なんと城を整備する段階で東軍への逃走経路を確保していたというのです。

寝返りは突然などではなく、すべてがシナリオ通り？と言えそうです。

いち早く不審な行動に気づいた大谷吉継も時すでに遅しだったのでしよう。

何百年も忘れ去られていた玉城ですが、皮肉にも赤色立体地図により敗者の象徴として脚光を浴びることになりました。

『驚き、桃の木、明治の記』

④（緒方洪庵）適塾の所郁太郎と井上馨

チーム葵 今川 博明

今回は適塾の続きです。この適塾出身者には世に知られていない『所郁太郎』という人がいたそうです。

実は彼こそが、長州藩士であり維新後は外相、蔵相を歴任した井上馨を救った一人の医者でした。

井上馨（門多）は当時、伊藤博文らとイギリスへ密航留学し、帰国したために強硬派から命を狙われていました。ある日、会議の終了後に一人で女のところへ行くと言つて別れた後、暗闇の中で尊王攘夷派の長州藩士にめつた切りにされました。井上は相当切られ転がって小川に落ちたため、襲撃者たちは、暗闇という事もあり、井上は死んだと思ひその場を去りました。しかし、彼はまだ息を吐いていたのです。なぜなら、京都の祇園芸妓で有名だった『君尾』から、イギリスへの密航留学で京を離れる時に「私の魂です」と渡された手鏡が胸にあつたので、致命傷の胸部を救われたのでした。

しかし瀕死の状態であり、直ぐに兄の五郎三郎が駆けつけて、二人の藩医を呼びますが、手の施しようがないと断られます。

井上は苦痛のために喘ぎ叫び誰もが聞くのもつらい時間が続きます。あまりにも苦しいので、ついに井上は切腹するので、兄に介錯を頼みます。兄は弟の苦しみをこれ以上見てはおられず、ついに武士の同胞に愛情の道を選び、刀を引こうと決心します。

その時です、お母さんが井上の背中に抱きついて叫びます。

「弟を介錯することが武士の情けなら、この母と共に合わせて切りなさい」

「聞多、生きるのじゃ。死んだらお国のため

に尽くせなくなるではないか。生きるのじゃ」と。運命とは不思議なものです。この近くで開業していた医者「所郁太郎」が通りかかったのでした。しかし、手術道具などもないので、職人の針で縫合することを決意します。消毒は焼酎で対応し、当然麻酔無しでの手術となります。

「聞多さん、私は所郁太郎です。あなたは、この苦痛から逃れるために死にたいだろが、母上はあなたを抱いてまでも、兄を制された。母上は君に生きよとおうせられている。君は生きねばならない。私は君を生かすために、これから手術をする。このような傷を手術で救えるかは分らない。また、手術は苦痛だが生きるために耐えなさい。満身の氣力を奮い起こして手術の苦痛に耐えるのです」

手術は夜の一時から夜中の一時まで及んだそうです。井上は死ぬほどに痛みを感じたであろうが耐えしのいだ。そのおかげで明治まで生き延びたのでした。

所郁太郎には、常に緒方洪庵先生の教えが頭にありました。

「医者というのは人を救うために生きるもので、自分のために生きるものではない。」

この言葉は、所郁太郎が学び、彼の人生で大きな影響を受けた適塾の師・緒方洪庵の口ぐせであり、教えだったそうです。

自己の立身出世や、有名になろうとして、上手く立ち回ることなど考えるべきではない。まず人は自分の目の前にあるものを救うために全力で生きるべきなのだ。・・・いうことを。

人の運命というのは分らないものです。

所郁太郎に救われた井上馨は、七九歳まで生き延びました。でも救った彼は、その一年後に腸チフスで死去してしまいました。享年二十七歳、あまりにも短い人生でした。

下鴨神社の新たな祠

チーム葵 古谷 正弘

運動不足解消のため久しぶりに下鴨神社を散歩していると。流鏑馬神事のある馬場で、いつの間にか雑太社の両脇に新しい祠が建っていました。平成二十七年の式年遷宮の事業として建てられたようですが、以下紹介します。

「加茂斎院御歴代斎王神霊社」：その名の通り、祭神は有智子内親王はじめ歴代の加茂斎院三五人の神霊。応仁の乱で焼亡し、その後は旧鴨社神宮寺域内に祀られていたようですが、知りませんでした。昭和三十三年の式年遷宮で三井社に仮遷御し、今回の式年遷宮で再興。

「二二所社」：加茂建角身命の系譜のほか、天皇の系譜や天皇から姓を賜った祖先の系譜など二二の鴨氏の始祖神を祀る社で、下鴨神社の第六摂社。古くから旧鴨社神宮寺域内に祀られ、正徳元年（一七一）には雑太社と相殿になり、今回の式年遷宮で雑太（さわた）社と袂を分かち、造営されたそうです。

「河崎社（こうさきのやしる）」：祭神は加茂建角身命の系譜の始祖神で、現田中神社・知恩寺付近（山城国下栗田郷河崎里）に造営された社だそうですが、度々戦火で焼失し、住民は、糺の森の西にある鴨社神館御所跡に村ごと移住し、河崎社も天明五年（一七八五）遷御したという記録があるそうです。大正十年京都市の都市計画により社地が下鴨本通となったため、河崎社は先の加茂斎院御歴代斎王神霊社に合祀されるも、昭和三十三年の式年遷宮で社殿は撤去されたままになっていたので、今回の式年遷宮でようやく再興したそうです。それとは別に、現在知恩寺境内には、鴨神社があ

京都の地味なお話

チーム彩 奥西 不二

「新京極通り、二つ石碑の間にある八つの社寺」明治になって二代目知事の榎村正直は秀吉が寄せ集めてきた寺々の境内の壁をぶち抜いて南北に通りをつくり、一大歓楽街に仕立てあげました。もともとそれらの寺々へ参詣する人々を相手に見世物小屋や茶店・もの売りが集まっていたところに一本の通りができたわけですからより繁華な世界ができるのは当たり前だったのかもしれない。



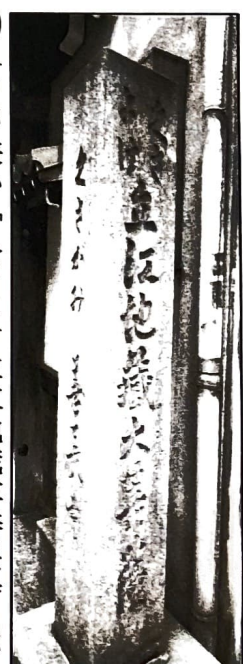
(一つ目の石碑)

(一) 新京極通の入口はどこか、たぶん四条通から南の住人は四条通り角の交番所のあるところかと思えます。交番の西となりの甘栗屋さんの店を通り抜けると染殿院の小さな境内に入ります。本尊の染殿地蔵は文徳天皇の女御の藤原明子が安産祈願をして清和天皇を授かったという由来から多くの人の信仰を集めています。中世には時宗の道場あり一遍上人も布教活動をしてきたようです。



(二) 錦天満宮は歓喜光寺の鎮守社でありました。(新京極界わいの社寺)

お寺は明治以後に立ち退いて今は山科大宅に再建され、神社だけが残り残りました。修学旅行生にはロボット獅子のからくりおみくじが人気です。



(三) 入口が狭い「久さよけ立江地蔵尊善長寺」があります。子供の皮膚病の予防にご利益があるらしいのですが、今は参詣する人は少ないようです。

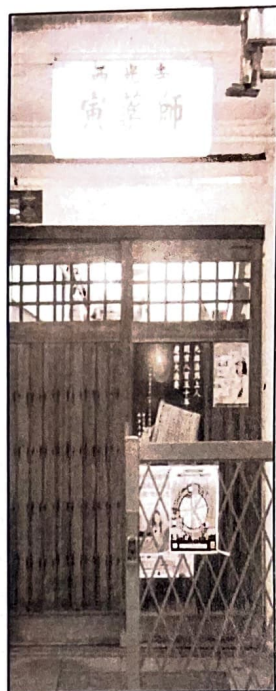


四次に新京極通と蛸薬師通と交差する東南角にあるのが「倒さ蓮華の安養寺」で洛陽六阿弥陀五番目の札所です。阿弥陀さんが蓮華を逆さにした蓮台に立っておられるのが珍しいと言われています。

(四) 蛸薬師は「永福寺」というのが正式名ですが親孝行の坊さんが蛸を母親に食べさせた話がある有名になって通称名になったとか、池があったので澤（たく）の薬師が訛って蛸になったとか。

奥にある妙心寺（阿弥陀堂）は明治時代に永福寺の代わりに三河の国岩津村から移された名残だとか、面白い話がいっぱいありそうです。京都十二薬師十二番札所です。

(内)ここも間口が狭いので入りにくい西光寺です。本尊は阿弥陀さんですが、「寅薬師」の由来になるお薬師さんは弘法大師が寅の日の寅の刻に彫り上げたときとされています。京都十二番薬師十一番札所です。



(外)小さな楼門があるのが誠心院です。中に入ると思いのほか広い境内に驚きです。藤原道長の娘彰子が和泉式部のために法成寺の中の東北院に建立した「誠心院」が起りりとされています。恋多き和泉式部のファンは彼女の墓と言われている大きな宝篋印塔にお参りに来るところです。ちなみに東北院は真如堂の近くに再建されています。



(二つ目の石碑)

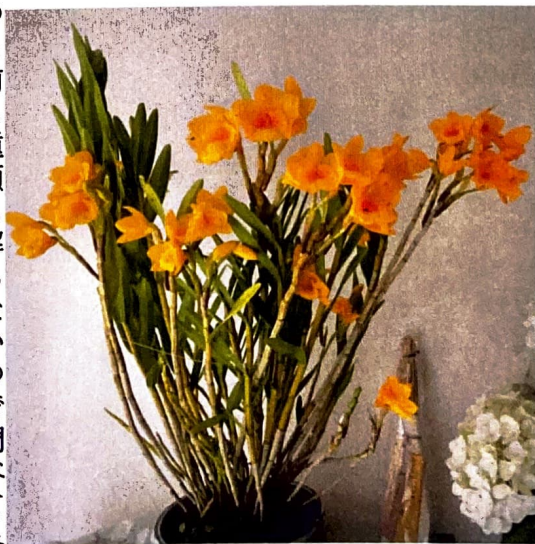
(外)誓願寺の門前に尋ね人の「迷子みちしるべ」があるというのはこの辺りの往時の賑わいがあると思えます。浄土宗西山深草派の総本山とは思えない親しみやすさです。境内の右には扇塚があり、本堂に入ると金銅の阿弥陀さんが優しく迎えていただけます。天智天皇の勅願寺として奈良に創建され、京都の一条小川に移転し、秀吉の手で再建され多くの塔頭と三重塔を持つ大寺院になりましたが、度重なる火災と明治維新の混乱で現在の姿に落ち着いたようです。江戸時代前期の五十五世法主安楽庵策伝はわかりやすく面白く説教したことでも後に落語の祖と言われました。今も本堂では落語会をはじめ様々なイベントが行われています。たまにしか見ることができないのですが、重文の「絹本著色誓願寺縁起三幅」は見応えのあるものです。

これら八つの社寺は度重なる火災や明治維新の混乱から立直り、大正、昭和、平成と、今も厚い庶民信仰に支えられながら、人々の青春の思い出とともに息づいていることに気づいて貰えばと思っています。ちなみに私の思いは美松の成人映画と吉本演芸場ですかね。



やっと咲いたか八年目
二代目 酔魔仙

コロナの所為か今年には自宅の花々(蜜柑・ツツジ・洋欄類)が例年になく満開となりました。特に十数年前に淡路の旅先で購入した蘭が開花した。購入時と三年後に一回咲いた限りで今年まで全く咲いた記憶が無い。八年と書いたが、恐らく十年近くは咲いていないのではないか。ネットで調べたら四年で咲いたという人のブログも見られた。



蘭の名前も種類も解らないので調べてみた。デンドロ系で「ハンコッキ」和名「竹葉石斛」(葉や茎が竹の様)と云われ、中国雲南からベトナム・台湾の七百mから千五百mに自生するといふ。育て方も知らず半分放置状態が原因で長く開花が見られなかったのでしょうか。



前回の投稿より多く咲いた石斛



花卉を撮影